

## 自然 歡喜

本徳寺副住持 大谷昭智

今年も雨が少ない。どことなくカラッとしたり天気だ。こんな時は、逆に油断して熱中症になりやすい。野菜が高騰する？今年の米は大丈夫？水不足は？と、不安を煽るニュースが飛び込んでくる。たしかに、今年の梅雨入りは平年に比べて少し早く、気がついたらもう梅雨入り？空梅雨かと、釈然としない。

気になるので、気象庁のホームページを覗いてみる。降水量を調べてみると、それほど目立って少ない訳ではない。六月の数値は平年並みだ。

今も昔も、人は自然の異常に過敏である。それもそのはず、太古より人は自然のきまぐれを恐れ、同時に、自然の恵みを受受してきた。特に降雨は食料生産に直結している。降雨の案配に苦慮するのは当然だ。

香川県に満濃池まんのういけという日本最古にして最大級の溜池がある。当時四八歳であった空海は嵯峨天皇に命じられ、弘仁十二年（八二一）に、この満濃池の改修工事を執り行った。堤防をアーチ型に改良し水圧を分散させ、岩盤を開削し、余水吐をもうけている。水を適量貯えておき、必要な時にだけ使う。水を使わない冬季に川の水を取り入れ、春先や初夏に耕作地へ円滑に供給できるシステムを構築した。

最近、里山の価値が見直されている。里山とは村落に近隣する共有の山林である。この里山から多くの生活資源を手に入れる。里山の落ち葉や枯れ枝が利用されることにより、赤松の林に松茸が群生し、表土は雨水を吸収して村の湧き水となる。日本の水田農法も梅雨時分の降雨を調整する自然のダム役割を果たしているという。

このように、自然の水の循環を大きく変えること

なく自然との折り合いを睨みながら水不足を解消している。このような人の自然への控えめな働きかけは、人間と自然の共生関係を見事に実現させているのである。

一方、現代文明は、人間と自然を対立する関係と見なし、「利用」か「保全」かの二者択一を迫る。「保全」しすぎると人間は自然に振り回され、「利用」しすぎると一時は重宝するが、自然は変貌し、温暖化のように大きな脅威となる。人間が自然を制御し利用しようとする企ては、いつも人間の敗北に終わって来た。古代文明の栄枯盛衰を見れば明らかである。

現代文明の源泉・古代ギリシャの哲人ヘラクレイトス Herakleitos は絶えず変化する自然界を前にして、こう答えた。「万物は流転する」(Panta Rhei, "everything flows")と、同時に、その背後に変化しない絶対的な物の理(ロゴス)を希求した。

これが西洋の思想で、いうところの絶対的な神の始まりである。万物は流転するのだが、その背後に唯一絶対的で永遠なものがある。それが砂漠の風土で神の啓示となつて結実する。この信仰を受け継いで一神教が開花する。後に、人がこのロゴスを引っさげて神の座に成り上がったのがヨーロッパ近代だ。これが現代文明のルーツである。

ところが、インドの仏教思想はこのような神を否定する。もともと、仏陀は、「人間と自然」の関係を「主体と対象」と見なす対立構造を虚妄分別であると見抜いた。つまり、自然と人間は別々のものではなく、相互挿入する両者の関係に注視する。両者の交流において自然も人間も転変万化する。従つて、諸行は無常であり、諸法は無我である。このような考え方を仏教では縁起法という。

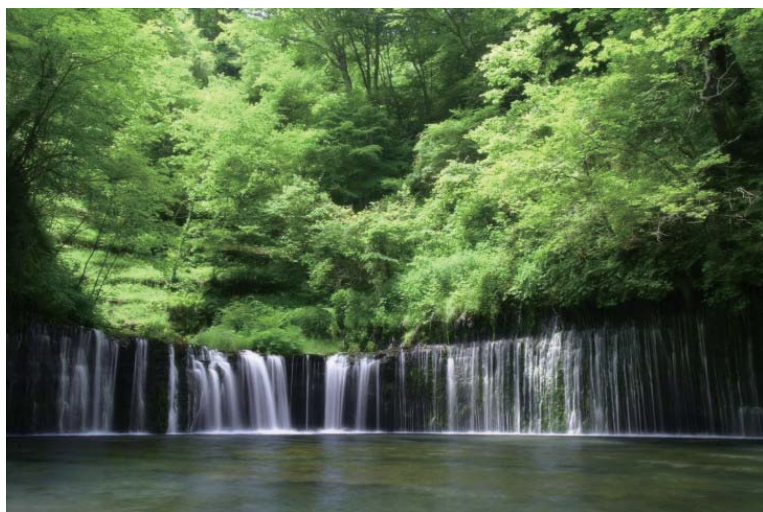
春になつたら種から芽生え、太陽と降水によつて成長し大輪の花が咲く。秋になれば実をつけ、それを落として冬になれば枯れて朽ち果てていく。この諸相の変化に因・縁・果の理法を見て取つた。変化そのものが主体である。つねに一切の変化の中に「関係そのもの」として「生かされて在る」という縁起の法を生き抜くことを教える。そして、

この釈迦の見出し出した法、つまり南無阿彌陀仏こそが永遠（無量寿）であるとする。だから阿彌陀仏は物でもなければ理でもない。働きだけの功德力である。これが仏法の根本原理だ。

我々が自然というものに向き合うとき、空海の溜池、里山の手入れ、そして水田農法など、日本には自然と付き合う仏教の智慧が豊かに息づいている。自然に対して利用か保存かを選択する前に、自然をはなれた人間も、人間のいない自然も存在しないということだ。

暑い夏には暑さを感じ、雨の少ない時期には渴きを感じる。しかし、暑い夏にこそ、まれに吹く風に涼しさを感じ、たまに降る雨に潤いを感じる。そこに生まれる歓びに生を感じる事が出来る。それはそれは、大変有り難い事なのである。

自然歡喜の弥陀法である。南無阿彌陀仏



## 本徳寺を読み解く

本徳寺住持 大谷昭仁

「御坊さん」と呼ばれるお寺が姫路には二つある。一つは亀山本徳寺、一つは船場本徳寺である。いずれも前身を英賀本徳寺に持ち、江戸初期に東西に分かれ、播州の真宗拠点として張り合っていた。戦後は、両院とも至って静かではあるが、心なしか元気がない。

しかし、地元のファンは意外に多い。先日、タクシーに乗って亀山の本徳寺を告げると、「御坊さん」のどの辺ですか？と聞かれ、「御坊さんは小さいときにばあさんによく連れていってもらったもんです。説教はようわからなかったが、お御堂の広い縁で座つると、心の底から落ち着くんですわ」と、かっさに話しかけてくる。事わけを言うと、「そういえば本徳寺と言うんですね」。地元の人は、「御坊さん」は身体で分かるが、「〇〇派本徳寺」は頭で理解するらしい。昔は、これといった娯楽も少なく、神社やお寺の催



亀山御坊本徳寺・本堂

この建物は寛政4年（1772）頃、西本願寺で阿弥陀堂の北に建てられた。その後、幕末には新撰組の屯所として使用されるなどしたが、本徳寺の新築本堂が1868年に焼失したため、1873年に急遽亀山に移築されたものである。

県指定文化財

しが唯一の賑を見せしていた。本徳寺も戦前までは彼岸ともなれば、門前に露店が建ち並び山陽電鉄が臨時列車を出すほどであった。戦後になって門前の総会所（説教所）やお講屋（門徒宿泊所）はとりこわされたが、行事ともなれば龍野や加古川、宍粟あたりから同行が群参し、泊まりがけで行事に参加し、説教に聞き入ったと聞かされた。本堂で法要が勤まり、終わると門外の総会所で説教が始まる。交互に大門を大勢の門信徒が行き来するため、我先にと押し倒されて怪我人が出たと古老から聞かされた。今では想像することもできない。

戦後、日本社会は激変した。大門前の説教所（総会所）は節磨の救済寺に移され、本堂として現在も使われている。門徒宿泊所はお講屋とも呼ばれており、播州各所の世話人が出向して講の同行の宿泊の便宜を図っていた。今でも寺内の蔵には、お講屋で使われていた講の提灯が残っている。戦後しばらくは戦災で焼け出された住居者がいたが、今から三十年ほど前に取り壊され、現在では門信徒の駐車場となっている。少子高齢化の波は容赦なく地方に襲いかかる。境内で常に聞かれた子どもたちの遊び声も無くなった。つわものどもが夢の跡である。

## 「御坊」とは

最近、NHK「軍師官兵衛」の番組製作の担当者から、英賀本徳寺のことで問い合わせがあった。「英賀御坊」と「英賀御堂」の呼称の違いを問われた。知っていることは答えたが、「御坊」という用語の歴史的根拠をたずねたことはなかった。

この際、「御坊」の由来を明らかにしてやろうと思いつき、とりあえず『真宗大辞典』を紐解く。例によって多様な事例を列挙するばかりでほとんど要領を得ない。自分なりにあれこれ考えるよりしかたがない。

最初は「稲田の御坊」のように使われていたようだが、後には「大阪の御坊」のような使われ方をするようになる。ご存じのように、「坊」は本来僧侶の住まいを意味し、その「坊」の主、つまり居住の僧を「坊主」と呼び、親鸞聖人であったり、蓮如上人であったりする。しかるに、「御坊」とは「坊」の尊称で、やはりそこに住まう高徳の僧とが一体になったニュアンスがあった。これが近世にかけてその意味づけが厳密になって来る。どんな組織でも大きくなると、組織の秩序統制が必要となる。本山・別院から中本寺・小本寺そして末

寺に到るまで正確にそのロケーションが決められて、それぞれの権限と役割を担うようになってくる。そのような機能面での時代要請にもなつて「御坊」は本山の別院、あるいはそれに準ずる寺院の名称となつて定着してくるようだ。

実史上、中世英賀時代の本徳寺は勅許院家のステイタスをもち本願寺一向門徒の拠点であった。近世においては西国の録所、や播磨国の中本寺として多くの寺内寺や末寺を抱え、本願寺宗門や幕府の寺院行政において重要な役割を担っていた。

明治になると、近代国家の中央集権化に連動して本末・檀家制度は廃止され、地方分権的な旧宗門は解体された。この時、本徳寺は別格別院となり、播磨国一円の西派門徒の崇敬寺院として運営されることになった。このような歴史的なブランドを肌で感じ取り、地域の人々は親しみと尊崇の念をこめて本徳寺を「御坊さん」あるいは「亀山さん」と呼んできたのだろう。



亀山御坊本徳寺由来碑（門前の門信徒駐車場）

明治になって、1871年に檀家制度が、1876年には本末制度が解体された。これに伴い播州の念仏組織は大きく動く。1905年、別格別院制が制定され、本徳寺は播磨国一円の真宗門徒を信徒として維持運営されるようになった。この石碑は裏面に蓮如上人以来の播州の念仏門の今に到る経緯が簡潔に示されている。戦前の宗教団体法の下では、「真宗本願寺派」であるが、戦後、「浄土真宗本願寺派」と変更された。

## 寺紋の役割

ブランドを象徴するアイテムに紋がある。今、本願寺の紋は下り藤(西六条藤)である。しかし、このステイタス・シンボルが昔からあったわけではない。明治以降の話である。

本来の本願寺の紋を調べてみると蓮如上人まではすべて牡丹唐草紋、実如上人は日野一流の鶴丸紋、証如上人は八藤紋、顕如上人は五七桐紋、江戸時代の歴代は何れも五七桐紋で変わらない。明治になって時代は動く、明如上人は一時、菊紋を、そして鏡如上人が下り藤紋と、変化する。紋はその時代時代にめまぐるしく変わる。しかも、特定の紋を寺紋とするといった定格もなければ概念もない。もともと紋は門主(法主)と



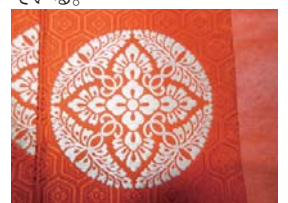
**大谷光瑞門主(鏡如上人)**  
1876-1948 本願寺第22世門主。明如上人の長男で皇后の姉九条篤子と結婚。本願寺の近代化に尽力する。大谷探検隊を組織し、西域仏教遺跡を調査し、近代仏教学に貢献する。



**西六条紋(通称・下り藤)**  
明治31年に大谷光瑞門主の内室・篤子(九条家より入籍)が九条家より入籍。その時に九条藤を家紋としていたが、九条藤をもって大谷家の家紋とした。これを西六条藤という。



**八藤紋**  
証如上人衣用紋で本徳寺実円が拝受した紋である。中世より本徳寺の由緒紋として、袈裟紋をはじめ本堂の役瓦紋や破風の紋、仏具や御文章箱、幔幕紋などに使用されている。



しての人格的個人に附与されるものだ。もちろん、近代的な挿げ換えのできる責任主体としての個人ではない。集団の中でその役割を自他共に自覚されて発現してくる個人である。

あえて寺紋の必要性を考えると、組織が一新されたり緊張状況に置かれると結束せねばならない。その必然として組織を象徴する寺紋が対外的に出てくると言うわけだ。

組織の脆弱な覚如上人から蓮如上人までは紋の必要性も乏しい。従って、後から門主紋を贈ったものだろう。牡丹唐草紋で統一されている。蓮如上人の時に本願寺教団は確立するが、実如・証如・顕如上人の急速な教団拡大と対抗勢力の台頭にともない紋もその都度変化して行く。一方、江戸の安定期にはほぼ桐紋で統一されている。近代の時代的変革の中で再び紋は変化を見せ始める。明如上人の菊紋、鏡如上人の下り藤のごとくである。

鏡如上人の下り藤紋は上人の御内室・篤子夫人が入輿の際に九条家から持ってこられた九条藤



**五七桐紋**  
この紋は太閤桐よりく問違え(これら)が、それより時代は遡るが、本徳寺が勅許院家を拝受した1559年(文禄)以来使用。上掲写真は寺法物箱の絵(大徳寺蔵)である。下写真は大門築地堀の役瓦である。いずれも桐紋が刻印されている。



だ。欧米列強の脅威に曝されたこの時代、日本の近代国家の体制をにわかに取り繕うため、エンペラー(天皇)を中心にした貴族制度を敷くことになる。そのため、本願寺門主は初めて姓を持ち、華族・大谷家を構える。その際、それまでの内司依紋・鶴丸を排し、九条家の了解を得て九条藤を大谷宗家の紋に使用したということだ。実際の西六条藤(下り藤)は九条藤を一部変えてある。それ以後、宗門の各組織にこの紋が流用されることになった。

ところで、本徳寺の大谷家の紋は本家同様に下り藤であるが、本徳寺の紋は八藤紋と五七桐紋が使われている。この由来を問うと中世まで遡る。本徳寺実円と本願寺証如との関係から生じたものである。

少し詳しく述べると、円如上人(実如の長子)ご早世により、証如上人は若千歳で法主職を継承する。その際、生前の実如上人から、上人の孫・証如上人の後見として、その大役を本徳寺実円が託された。その功勞により、本徳寺実円は証如上人からその法主紋である八藤紋を使用することを許されたということだ。それ以降本願寺と同様に八藤紋が使用されることになる。紋の使用にはそれなりの歴史的な由縁がないと成り立たないらしい。

証如期に本願寺は絶頂を迎え、門跡に列せられ、五七桐紋を使用するようになる。従って、次代・顕如上人の紋は五七桐紋である。それに連動して本徳寺は勅許院家に列せられ、五七桐紋を使用するようになった。このように本徳寺の内陣袈裟や建造物、什物に見られる八藤紋と五七桐紋は中世の本願寺教団の趣を色濃く残している。

玄智の考信録にも、本願寺が石山から京都西六条に移転後も、石山の風情を残すために八藤紋と桐紋を御影堂やその他の建造物に残したことを記している。

官兵衛と英賀合戦

最近、メディアからのインタビュアーが多くなつた。ご存じのように、NHK大河ドラマ「軍師官兵衛」の企画がその原因である。本徳寺でも、この官兵衛ブームを背景に、二〇一三年一月に亀山御坊楽市楽座実行委員会の主催で、「軍師官兵衛と仏教」と題して、フォーラムが開かれた。私と書写山・円教寺の大樹執事長との対談に多くの方が大広間に参集され、熱心に傾聴しておられた。「官兵衛と仏教」という切り口はシツクリこないが、この播州においては多に意味がある。その背景は多少複雑である。

もともと、播州の本願寺勢力を代表する本徳寺と天台宗・円教寺とはお互いに反目し合っていた。しかし、武力をもって天下を目指す、信長・秀吉の武勢が台頭し、新・旧の仏教勢力に対して共通の敵となった。敵の敵は味方という理屈



播磨灘物語・全4巻

司馬遼太郎が秀吉側の軍師・黒田官兵衛を主人公として播磨の一向勢力と信長・秀吉との攻防を描いた4巻からなる歴史大作である。これによって、軍師官兵衛の人物が世に知られるようになったと言われている。

で、とりあえず信長方の軍師・官兵衛を語る資格があるという訳だ。

もつとも、官兵衛を歴史に登場させたのは、あの有名な歴史作家・司馬遼太郎の「播磨灘物語」である。そこでは信長・秀吉と正面から対峙した一向宗（本願寺門徒宗）を相手に戦った秀吉の軍師・官兵衛の活躍がイキイキと描かれていたからである。

後日談ではあるが、司馬遼太郎（福田定一）の先祖は「福田家」で播州・英賀の出身であったことが本徳寺の寺内寺の過去帳からも明らかになった。司馬遼太郎は遠い先祖に思いを馳せ、何かに押される思いで大作「播磨灘物語」をものしたに違いない。その当時、播州での本願寺の拠点英賀は同時に本願寺の同盟・毛利氏の拠点でもあった。以下に、筆者が七年前に、バンカル NO.60 2006年夏号 神戸新聞総合出版センター「英賀御堂と亀山本徳寺」で論考した一節を引用して播州における石山戦争の顛末をご紹介しよう。

一五七〇年九月、信長による本願寺立ち退きの要請を拒否した顕如は、諸国門徒に蜂起を指令、十年にわたる石山戦争を開始した。この時、顕如より本徳寺をおして三木通秋に出兵の要請があり、三木源右衛門専時以下分家家人二百余人、一向信徒五百余人、地侍三百余人ならびに兵糧米三千俵を以て参戦し、多くの戦死者が出た。この痛手は英賀衆にとつては大きく、以後、後方支援を余儀なくされた。一五七七年には毛利軍勢が上陸、英賀の防衛を強化している。

信長の本願寺ネット攻略は一進一退しつつも、三河・越前・近江・伊勢長島の陸一揆を壊滅させ、本願寺包囲網は徐々に狭められていった。一五七六年以降、東方陸からの援軍は絶たれ、本願寺は籠城を余儀なくされ、戦局はもっぱら海に遷った。つまり、瀬戸内海の制海権の争奪が勝敗を決することになったのである。

この危機を打開すべく本願寺の同盟・毛利氏は、一五七六年七月に信長の水軍（摂津・和泉）による包囲網を大阪湾で撃破し、本願寺への物資の供給を成功させた。

この作戦行動に英賀は中継基地としての役割を担っていた。しかし、その主力部隊は海の一門門徒・三島村上一族であったことは言うまでもない。村上一族はその支配を芸予諸島に置く自立性の高い海の統領で、毛利氏が一向宗を尊重していたこともあり、毛利水軍の主力として活躍していた。しかし、翌年には信長が九鬼水軍に鋼装船を新造させて、大坂木津川口の戦いで毛利水軍を大敗させた。これ以降、内海の制海権が信長方に移ることになった。これによって、秀吉の播磨攻略が可能となったのである。

一五七八年、秀吉は書写山・十地院に陣を張って、本願寺・毛利方にあった三木城を別所長治の自害をもって潰し、播磨の一向宗の拠点英賀を眼下にとらえた。既に、英賀衆は別所氏への支援、織田方小寺氏との戦闘で消耗し、一五七九年、顕如から英賀衆に届けられた檄文に呼応できる戦力はすでになかった。英賀攻略は一五八〇年四月に開始され、もはや孤立状態にあった英賀寺内町は、秀吉の寝が入り策略も功を奏し、極めて短期間に崩されたらしい。その四ヶ月後、父・顕如の講和派と対立して最後まで籠城を続けた教如は大坂本願寺に火を放ち、ここに一世紀にわたって続いた中世本願寺ネットは終焉を迎えた。



「軍師官兵衛と仏教」をテーマに歴史対話の様子  
(於・亀山本徳寺・大広間 2013年1月27日)

亀山本徳寺住持・大谷昭仁（左）と円教寺執事長・大樹玄承（右）が、場敵対した信長・秀吉との攻防を話題に、当時の旧仏教と新仏教の立場の違いから、中世の社会情勢を踏まえて持論を披露した。亀山御坊楽市楽座10周年記念フォーラムのイベントとして企画され、関心のある市民約200名（神戸新聞発表）が参加して、熱心に聞き入っていた。



東西分流の真相

地元の門徒から本徳寺が東西にわかれた経緯をたずねられることが多い。当然、本願寺の東西分流とリンクしていることは明らかである。東西分流の経緯は史料によっていろいろな推測がされてきた。ここで、諸説を照合し、妥当な東西分流の経緯をつまびらかにしておく。

戦国時代、本願寺は石山(後の大阪城)に本拠を構え、日本における最大の民間勢力として、しかもネットワーク化した商圏を背景に存在していた。信長・秀吉との石山戦争によってこの勢力は解体され、本山・本願寺は京都に、本徳寺は亀山に移される。この時点では、本願寺も本徳寺も一つである。

石山戦争終盤、時の法主・顕如は平和的講和に傾き、



船場御坊本徳寺・本堂

船場本徳寺は1618年本多忠政の尽力により教如派(東派)・本徳寺として創建される。宝永の大地震で本堂が損壊、1718年に海澄連枝の時、榊原政邦の外護により新本堂が建立された。17間四面の壮大な本堂で幾多の火災や震災、戦災を免れ今に到っている。

市指定文化財



宗祖真向等身御影(亀山御坊内陣・右脇壇)  
1590年代から本願寺の人事刷新に際し、東派別立により池田輝政の意向を鮮明にした。教如からの池田輝政への働きかけも失敗し、教如と池田輝政との対立は決定的となった。このようにして、播州の真宗勢力は准如派に移

その長子・教如は徹底抗戦を意図した。所謂、ハト派とタカ派である。播州の真宗は教如派の強い地域でもあったが、本山・本願寺において、顕如の没後、教如が法統を継承するが、時の天下人・秀吉にとつてタカ派のリーダの起用はおもしろくない。秀吉は、生母如春尼による三男・准如への譲り状の露見を幸に、トップを准如にすげ替えた。

この時以来、教如は引退を余儀なくされ裏派として雄伏する。准如は京都本願寺を引き継ぎ、公に表派を標榜することになった。これが今に続く西本願寺(浄土真宗本願寺派本願寺)である。

教如派は、その後、巻き返しを図り、関ヶ原以降、家康との接触を深め、烏丸七条に教如派の本寺開設に漕ぎ着ける。今に到る東本願寺(真宗大谷派)の誕生である。このように稀代の為政者・家康は教団内部の対立をうまく利用しながら、東西分断をもって本願寺の潜在的脅威を軽減することに成功した訳である。

中央の分断騒動は、地方にも大きな混乱を与えた。播州では、亀山本徳寺の住持は教如派の教専が継承していたが、後継問題で教如と対立し表派帰属の意向を鮮明にした。教如からの池田輝政への働きかけも失敗し、教如と池田輝政との対立は決定的となった。このようにして、播州の真宗勢力は准如派に移

行することになった。亀山本徳寺内陣・右脇壇には、この時准如より下附された親鸞聖人真向等身御影(大谷本願寺親鸞聖人御影)が安置されている。

池田氏転譜後、本多忠政の入譜により、播州教如派の家臣団にとって再興の好機が訪れた。忠政の意向もはたらき、旧池田家屋敷を寄進して、船場本徳寺つまり東派の本徳寺を再興させることになった。亀山本徳寺の山号が「霊亀山」であるに対して船場本徳寺は「轉亀山」という。もともと真宗の寺に山号はどうかと思うが、「轉亀山」の由来には教如派の思いがこめられているようだ。

静かに息づく念仏道場

さて、このような歴史的経験を刻み込んだ事物の集合を文化遺産と言うらしい。文化遺産は単なる過去の秘話を封印してあるのではなく、歴史的価値を今に発散しつつある。歴史的価値には二つある。その一つは静止的価値で、好古的・美術的・史料的な「もの」そのものが価値をもつ。他方、動的な価値がある。これらは「もの」そのものではなく「もの」を媒介にして發揮する価値である。従って「もの」は置き換えられていく。

たとえば、真宗のご本尊などは、名号から絵像に、絵像から木像に変遷してきたが、その時代時代にお念仏の真価を發揮してきた。お寺の土地や建物、境内や植生などは、時代的な変化を通して信仰を体感できる空間を創出する。

一般にお寺の建立や整備は、長い時間をかけて地域の門徒の懇念で建てられる。このように特殊な地域的事務をもって、地域のシンボルとなる。

世人は、本徳寺の境内に一步足を踏み入れるや、近代の喧噪とはかけ離れた、静かな落ち着きと深い安らぎを感じると言う。それはまさに色々な要素が組み合わされた歴史的価値に触れているからである。この価値はお寺を支える多くの人によって次代に受け継がれる。